

「山上の説教」の舞台設定に隠された神の秘密

ベレーシート

●今回の「霊性の回復セミナー」のテーマは、ギリシア語で書かれた福音書をヘブル的視点から解釈するために、ギリシア語をヘブル語に戻して解釈してみたいと思います。10年ほど前に北海道の旭川で、メシアニック・ジューのラビであるヨセフ・シュラムという方の講演があるというので参加しました。その講演の主題は「**イエシュアはユダヤ人である**」でした。一見、当たり前のように思われますが、このことが意味することを理解した人は、おそらく、少なかったのではないかと思います。4~5年程前から、この主題が意味する事の重大さに私もようやく気づき始めました。1948年にイスラエル建国と同時に復興されたヘブル語の助けがなければ、イエシュアの語ったことばの真意は理解できないと考えるようになってきたからです。

●長い間、死語となっていたヘブル語が復興されたことは、神の大いなるご計画においてきわめて重大なことだと思えます。というのは、**ヘブル語は神の御子イエシュアを啓示する神が定められた唯一の聖なる言語である**と信じるからです。この視点をもたなければ、たとえヘブル語を話すユダヤ人がいたとしても、神の啓示を理解し悟ることはできません。ギリシア語をヘブル語に戻して解釈(ミドウラーシュ)することによって、これまで見えなかったことが見えてくるのです。今回のセミナーでは、そのことを実際に検証してみようと考えています。

●ヘレニズム(ギリシア的思惟)は、今や全世界に浸透している人間中心の文化です。このヘレニズムと唯一対抗できるのが神中心のヘブライズム(ヘブル的思惟)です。そこには思惟概念の相克(衝突)があります。使徒パウロはヘレニズムを「この世の知恵」と呼び、ヘブライズムを「神の知恵」と呼んでいます。パウロはこの両者には何のつながりも、まじわりも、調和も、かわりも、一致もないことを強調し、「つり合わぬくびきをいっしょにつけてはならない」と述べています(Ⅱコリント 6:14~18)。これはやみと光との衝突であり、御国が完全に到来する日まで続きます。ヘレニズムとヘブライズムとの相克(衝突)は古くて新しい問題です。今日のキリスト教会において、従来の置換神学からヘブル的視点による聖書解釈に次第に目が開かれて来ている現象は、終わりの日に向けられたヘブライズムの復興と言えます。1948年にイスラエルが奇蹟的に建国したことに伴い、約二千年間にわたって死語とされてきたヘブル語が復興したことは、神のご計画における必然的な出来事であったと信じます。

●そのことを理解するために、ゼカリヤ書 9章 12~13節を見ましょう。

【新改訳改訂第3版】

12 望みを持つ捕らわれ人よ。とりでに帰れ。わたしは、きょうもまた告げ知らせる。わたしは二倍のものをあなたに返すと。

13 わたしはユダを曲げてわたしの弓とし、これにエフライムをつがえたのだ。シオンよ。わたしはあなたの子らを奮い立たせる。ヤワンはあなたの子らを攻めるが、わたしはあなたを勇士の剣のようにする。

●ゼカリヤ書 9 章は、メシアの初臨と再臨、そして全イスラエル(ユダとエフライム)が長子としての権利を回復することが預言されているきわめて重要な章です。全イスラエルはここでは「望みを持つ捕らわれ人よ。」と呼びかけられ、メシアが君臨される「とりでに帰れ」と語られます。「とりで」とはエルサレムのことです。そして全イスラエルは、神の長子としての権利を回復されます。そのことを聖書は「二倍のものを帰す」と表現しています。なぜなら、長子の権利は「二倍の祝福」を受けることだからです。そして主は、「シオンよ。わたしはあなたの子らを奮い立たせる。ヤワンはあなたの子らを攻めるが、わたしはあなたを勇士の剣のようにする。」と呼びかけています。ここで出て来る「ヤワン」ということばが「ギリシア人」を意味しています。ギリシア人とはヘレニズムの文化をもった、いわば人間中心主義の世界観を象徴しています。そのヤワンが「あなたの子らを攻める」とは、ヘブライズムの神中心主義の世界観を攻撃するということです。しかし、神は「わたしはあなたを勇士の剣のようにする」と預言しています。

●ここで言いたいことは、神中心主義に立つ者たちはみな「ヘブル人」と言えます。異邦人であってイエス・キリストを信じることによって、ヘブル人に接ぎ木されているからです。そもそもヘブル人(「イブリー」עִבְרִי)とは、「川を渡ってきた者」のことを意味します。それは「人間中心の世界」から「神中心の世界」に渡って来た者たち(「イブリーム」עִבְרִיִּם)を象徴しているとも言えます。イスラエルの国の復興と同時にヘブル語が復興したことは、終わりの日に向けた神のご計画における深遠な意図と無関係ではないと信じます。

●前置きがかなり長くなってしまいましたが、今年(2017年)の1月から礼拝で「マタイの福音書」から「イエシュアの公生涯」を取り上げて講解説教を始めました。特に、私たちがそれほど考えずに淡々と読み過ぎてきた箇所をヘブル語に戻して解釈し、瞑想することによって、今まで見えていなかった驚くべき秘密が隠されていることを知り始めています。そこで以下、マタイの福音書 5 章 1~2 節にある「山上の説教」の舞台背景の記述をヘブル的視点(ヘブル語)から解釈(注解)してみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 5 章 1~2 節

- 1 この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。
- 2 そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。

●さて、この文章(5:1~2)の中にどんな驚くべきことが隠されているのでしょうか。ここには、これから語られる「山上の説教」の舞台となる背景が記されていることは明白です。舞台背景となる 1 節が記されていなくても、イエシュアは「彼らに教えて、言われた。」だけで話は十分通ります。ところがマタイは、上記のように記す**必然性**があったと思われる。「山上の説教」それ自体だけでも「御国の福音」と深く関係することはもちろんのことですが、イエシュアの教えや奇蹟のみならず、イエシュアの指示的行為や行動、順序、配置、登場する人の名前や地名なども、すべて「御国の福音」と深く関係しているのです。つ

まり、どこを切ったとしても「御国」の概念なしには理解できない仕掛けになっているのです。しかも、その仕掛けを紐解く重要な鍵がヘブル語に隠されているのです。

●その隠されている事柄を明らかにするためには、「**問いかけること**」(突っ込みをすること)が重要です。例えば、なにゆえにイエシュアはガリラヤのナザレで育ったのか。なにゆえにイエシュアはガリラヤから宣教を開始されたのか。なにゆえにイエシュアは漁師である者たちを召し出されたのか。なにゆえにイエシュアは山に登られたのか。・・・などなど、これらは問いかねなければ、そのまま通り過ぎてしまうような事柄です。ところが、問いかけることによってはじめてその**必然性**について深く考えることとなります。実は、そのことがとても重要なのです。もし教会で信徒が牧師に突っ込みをしたとき、「そんな質問はすべきではない」と言われたとしたら、その信徒は二度とその牧師に質問することをしなくなるはずですが、これは一種のパワーハラスメントです。事実、そのような教会が多いのではないかと思います。クリスチャンホームの親が子どもの質問に対して真摯に答えるなら、子どもはどんどん質問し、学ぶ楽しみを増していくはずですが、ですから親も牧師も真剣に学ぶ必要があるのです。この構えがなければ、教会教育はいのちを失い失敗の運命にあると言っても過言ではありません。したがってみことばを扱う教役者は常に問いかけ続け、突っ込みをする必要が求められるのです。

1. 群衆を見られたイエシュア

●さて、5章1節に「**この群衆を見て**」とあります。ここで「見て」と訳されたギリシア語は動詞の「ホラオー」(ὁράω)のアオリスト分詞(「エイドン」είδον)で、「見たとき」という意味。ギリシア語の「見る」を現わす二つの語彙の違いについて、一般的に、「～の方に向く、～の方を眺める、たまたま目でものを見る、一見する」という意味では「ブレポー」(βλέπω)を使い、見た結果として、「知る、分かる、味わう」などの意味合いが入るときには「ホラオー」(ὁράω)を使うようです。マタイ5章1節の「見て」は後者です。この「ホラオー」をヘブル語にすると「ラーアー」(הִלֵּךְ)となり、この動詞の初出箇所は創世記1章4節で「神は光を**見て**良しとされた。神は光とやみとを区別された。」というところで使われています。人間の視力では見ることのできない光を神は「見て」、神はそれを良しとされたのです。この「光」の概念について、使徒パウロは「『やみの中から輝き出よ』と神に呼び出された光」と理解しました(Ⅱコリント4:6)。さらにパウロはこの光について、エペソ人への手紙1章で、「神のご計画、みこころ、みむね、目的」だと悟り、神を賛美しています。つまり、「神様にはやりたいことがある」という全容が光の概念なのだと私は理解しています。

●またこの「見る」という動詞は、次の場面でも使われています。アブラハムがモリヤの山でイサクをささげようとしたときに、イサクが父アブラハムに尋ねます。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」と(創世記22:7)。すると父アブラハムは答えます。「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」と。この「**備えてくださる**」と訳された動詞が「ラーアー」(הִלֵּךְ)なのです。神が見つけてくださるというのが原文の直訳ですが、同じ語彙が13~14節に

もあります。「アブラハムが目を上げて見ると、見よ、角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の子の代わりに、全焼のいけにえとしてささげた。そうして、アブラハムは、その場所を、アドナイ・イルエ(הַאֵלֹהִים)と名づけた。」。この「イルエ」が「ラーアー」の未完了形で、その意味することは「主の備え」ではなく、「主のヴィジョン」であるとユダヤ教の神学者の一人であり、ラビでもあるアブラハム・ヨシュア・ヘシエル(1907~1972)は解釈しています。このことは以前にも、霊性の回復セミナーで取り上げたことがあります。しかも、神のご計画の中心に位置づけられる「エルサレム」は、ヘブル語で「イエルーシャーライム」(יְרוּשָׁלַיִם)です。そこは神が常に関心をもって見ておられるところであり、神のヴィジョンが完成されるところでもあります。つまり、「エルサレム」という町(都)の名は、「神のご計画のヴィジョン」を意味する「ラーアー」(הַאֵלֹהִים)の未完了形「イルエ」(הַאֵלֹהִים)の短縮形の「イル」(אֵל)と、そのヴィジョンが完成することでもたらされる神の祝福の総称である「シャーローム」(שָׁלוֹם)の複数形である「シャーライム」(שָׁלוֹמִים)とが結びついてできた名前だということです。つまり、「エルサレム」という町の名に「神のヴィジョンとその完成の祝福」の意味が込められているのです。

●このように、「見る」を意味するヘブル語の「ラーアー」(הַאֵלֹהִים)を単に目で見るといった次元で終わらせずに、神のご計画において「主の山にはヴィジョンがある」という視点(観点)から「見る」を理解するとき、神の壮大なご計画の中に私たちは引き寄せられるのです。それゆえ、マタイの福音書の5章1節の「この群衆を見て」ということばの中に、イエシュアは神の壮大なご計画のヴィジョンという視点から群衆を見ておられると推測できるのです。ではいったい神の壮大なご計画のヴィジョンとは何を示唆しているのでしょうか。その答えは、イエシュアが教え、宣べ伝え、デモンストレーションしている「御国の福音」です。

2. 山に登り、おすわりになったイエシュア

1 この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとにきた。

●イエシュアは「この群衆を見て、山に登り」とあります。「この群衆」とは、その前(4:25)に記されている「ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸から集まって来た大勢の群衆のことです。そして、イエシュアは彼らのニーズに答えた後に山に登っています。「彼らのニーズ」とは、具体的には「いやし」です。これは教えや宣教に附随する「御国の福音」をあかしするデモンストレーションです。つまり、御国(神の王国の支配)とはあらゆる病気とわずらいのない世界であり、それが一瞬にしてもたらされる世界だということです。それは「朽ちない新しいからだ」が与えられるからです。「良きおとずれを宣べ伝える」というヘブル語の動詞が「バーサル」(בָּשַׂר)であり、その名詞が「肉体」を意味する「バーサール」(בָּשָׂר)だということを知るなら、おのずと理解できる話なのです。

●ところで、なぜイエシュアは「山」に登られたのでしょうか。ここでは「山」がどこの山なのか一切説

明されていませんが、「山」はイエシュアにとって一人になって祈ることのできる格好の場所だったと言えます。一人になって祈れる場所は「山」だけでなく、「寂しい所」もその一つでした(マルコ 1:35)。また「朝早くまだ暗いうちに起きる」ということも一人になれる最高の時でした。このように、イエシュアはしばしば山や寂しいところに退き、一人になって過ごすことを常としていました。それは働きによる疲れをいやすだけでなく、御父とともに過ごすためでした。しかし、「山」にはもっと重要な事柄が隠されています。

(1) 「山」

●聖書における「山」は、神の啓示の場であることがしばしばです。アブラハムはモリヤの山で愛するひとり子のイサクをささげるように命じられます。そこでアブラハムは神のヴィジョンを見せられます(創世記 22:2,14)。モーセは神の山ホレブで主と出会い、神の民をエジプトから救い出すことを命じられます。また、エジプトを出た神の民のために神の律法を受け取る場所も同じくシナイ山でした。預言者エリヤは同じ場所で彼の後継者について語られています。ダビデは主の臨在の象徴である「契約の箱」をエルサレムに運び上っています。またイエシュアはヘルモン山で変貌し、本来の神の姿を現わします(マタイ 17:2)。また、弟子たちに対するイエシュアの大宣教命令はガリラヤの山でなされました(マタイ 28:16~20)。また聖書において「山」は、しばしば「エルサレム」を意味しています(マタイ 5:14)。詩篇 24 篇 3 節で、ダビデは「だれが、【主】の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。」とあります。このダビデの問いかけの答えは、イエシュアを指し示しています。

(2) 山に「登る」という行為

●イエシュアが山に登るという行為はきわめて預言的です。なぜなら、ヘブル語で「登る、上る」という動詞は「アーラー」(אָרַר)ですが、この動詞は単に「登る」という意味の他に「(いけにえを)ささげる」とか、「反芻する」という意味があるからです。「反芻する」動物はきよい動物であり、全焼のいけにえや罪のいけにえとして神の祭壇にささげられる牛や羊です。つまりイエシュアが「山に登る」という行為は、やがて聖なる山エルサレムにおいて、神にささげられる神の小羊イエシュアご自身を預言的に象徴していると言えます。

(3) 「座る」という行為

●群衆をご覧になったとき、イエシュアは「山」に登られました。そしてイエシュアが「おすわりになると」、弟子たちがみもとに来たと記されています。正確には「おすわりになったとき」(分詞アオリスト)、弟子たちが近づいて来たのです。「おすわりになる」のギリシア語は「カスイゾー」(καθίζω)の分詞で、「座ったとき」という意味になり、そこにイエシュアの弟子たちが「近寄って来た」(「プロセルコマイ」προσερχομαιのアオリスト)と続いています。1 節は、二つの行為が区切られているというイメージです。つまり「見て、イエシュアは山に登った」ということと、「イエシュアが座っていると、弟子たちが近

寄って来た」という二つのことを少々区別して理解することは有益です。なぜなら、「山に登ること」と「座ること」とは別の事柄だからです。

●「おすわりになる」とは、「着座された」という意味で、それをヘブル語にすると「ヤーシャヴ」(יָשָׁב)になります。「ヤーシャヴ」という動詞は、単に腰をおろして「座る」という意味だけでなく、**主の家に神と人とが「とどまる、住む」という親しい交わりの概念**があります(詩篇 23:6)。

●詩篇 15 篇 1 節で、ダビデは「主よ。だれがあなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか。」と問いかけていますが、これは「終わりの日」に王なるメシアであるイエシュアによって実現します。腰をおろして座るという意味のギリシア語「カスイゾー」(καθίζω)という語彙からは見えてこない真理が、ヘブル語に戻すことで見えて来るのです。

●イエシュアが山に登った後、イエシュアがおすわりになっているところに弟子たちがみもとにやって来たという一連の動きと、その弟子たちに対して御国の憲章をイエシュアが口を開いて語り出したというつながりの中に、神のご計画における預言的な意味が隠されています。つまり、イエシュアが再臨され、王なるメシアとして、聖なる山エルサレムを中心とした御国(統治、王国=千年王国)を治められます。その御国における憲章が、3 節以降で「山上の説教」として語られるのです。その憲章は、エレミヤが預言した新しい契約に基づくものであり、神の霊によって主の律法が心に書き記された者でなくては、とても守ることのできない憲章です。それはやがてイエシュアの再臨によってはじめて実現されるメシア王国の憲章です。「天の御国は近づいた(=到着した)」とあるように、それはイエシュアの来臨によって「**すでに**」はじまっているのですが、「**いまだ**」完全には実現していません。

3. 「弟子」を呼びだされたイエシュア (聖書的な「弟子」の概念とは)

●イエシュアが山に登り、おすわりになったあと、そこに弟子たちがみもとに来たとあります。ここで初めて「弟子」(「マセーテース」μαθητής)という語彙が登場します。「マセーテース」(μαθητής)は、本来「学ぶ者」という意味で、「教師」(先生、師)に対応する語彙です。

ただし、70人訳(LXX)聖書では使われていません。ということは、「弟子」という語彙は新約聖書で初めて使われる新しい概念を持った語彙だということです。ヘブル語の「タルミード」(תַּלְמִיד)がそれに相当します。この「タルミード」の語源は動詞「ラーマド」(לָמַד)で、「教える」・「学ぶ」という両方の意味が含まれています。「弟子」という語彙は旧約聖書では1回しか使われていません(I 歴代誌25:8)。

| | |
|-------|-------|
| 愛の関係 | 御父—御子 |
| | 神—神の子 |
| 働きの関係 | 神—メシア |
| | 神—使徒 |
| | 主—しもべ |
| | 師—弟子 |

| | | | |
|---------------|--------|---------------|-------------|
| タルミード | イム | メーヴィーン | カッガードール |
| עַם-תַּלְמִיד | | מִבֵּין | כְּגֵדוֹל |
| 弟子 | ～も～も共に | 悟りを与えられた者(分詞) | 大いなる(形) 同様に |

【新改訳改訂3】 達人も弟子も、みな同じように任務のためのくじを引いた。

【口語訳】 教師も生徒も皆ひとしくその務のためにくじを引いた。

【新共同訳】 熟練した者も初心者も 区別なく、くじによって務めの順番を決めた。

●イエシュアは「弟子は師以上には出られません。しかし十分訓練を受けた者はみな、自分の師ぐらいにはなるのです。」(ルカ 6:40)と言われましたが、ここでイエシュアが言わんとしていることは「教師と生徒」には雲泥の差があるということです。特に御国の奥義(秘密)に関しては、弟子たちはラビ(師)以上には出られないのです。ですから、弟子たちは師から学び続ける必要があります、御国の奥義を「求め、捜し、たたき」続けなければならないのです(マタイ6:33, 7:7~8)。そのために、ガリラヤのラビであるイエシュアは宣教開始と同時に弟子たちを招いています。それは彼らに「御国の奥義」を教え、悟らせるためなのです。

●ちなみに、「弟子」を意味するギリシア語の「マセーテース」は261回。四福音書(マタイ72回、マルコ46回、ルカ37回、ヨハネ78回)と使徒の働き(28回)のみに使われています。パウロの書簡では使われておらず、「しもべ」を意味する「ドゥーロス」(δοῦλος)、それをヘブル語にすると「エヴェド」(עֶבֶד)、
「仕える者」を意味する「ディアコノス」(διάκονος)、ヘブル語にすると「メシャーラット」(מְשָׁרָט)という語彙が使われます。なぜパウロは「弟子」という語彙を使わなかったのでしょうか。それは彼自身が主の弟子の一人であったからではないでしょうか。事実、パウロ以外にイエシュアの弟子としての本分を有した者はだれ一人としていませんでした。事実、彼は主の弟子として実に多くの奥義を示された人でした。

●さて、イエシュアが山に登り、おすわりになったあと、そこに弟子たちがみもとにやって来たとあります。新約聖書で「弟子」(「マセーテース」μαθητής)という言葉は、マタイの福音書 5章 1節ではじめて登場します。そしてマタイの最後の章でも、「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」(28章 19節)とあります。「弟子」の本分とはいったい何でしょう。それは「神の秘密を学び、教えること」です。

●マタイの福音書 13章には「天の御国の奥義」が語られています。大ぜいの群衆に対して、イエシュアは多くのことをたとえで話されました。すると弟子たちが近寄って来てイエシュアに尋ねます。「なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか。」と(マタイ 13:10)。その質問に対するイエシュアの答えはこうでした。「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。」(13:11)。つまり、天の御国の奥義を知ることが許されている者こそ、イエシュアの弟子なのです。

●さらに、イエシュアは「天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物でも古い物でも取り出す一家の主人のようなものです。」(マタイ 13:52)とも言っています。ここでイエシュアは「天の御国のために弟子とされた者」のことを「学者」と呼んでいます。「弟子」=「学者」(「グランマテュース」γραμματεύς)です。「学者」のヘブル語は「ソーフェール」(סוֹפֵר)です。どんな学者かと言えば、自分の「倉」、すなわち自分の「宝物倉、宝庫」から、いつでも、どこでも、「宝」を自由に取り出すことので

きる主人のような天の御国の「学者」だというわけです。とすれば、「弟子」についての理解がかなり変わってくるのではないのでしょうか。

●この意味において、「弟子となること」と「弟子を訓練すること」は、いつの時代の教会においても、重要なテーマと言えます。それは教会における奉仕や愛の実践のレベルではなく(それも大切な事柄ですが)、むしろ教会の土台にかかわる事柄です。天の御国の「学者」となって、そのすばらしさに人々の目を開かせ、導くことのできる者こそ、**聖書が教えている「弟子」の概念なのです。**

●しかも、聖書的な弟子は「**王の務め**」を担っています。なぜなら、「事を隠すのは神の誉れ。事を探るのは王の誉れ。」(箴言 25:2、新共同訳では後半の部分を「ことを極めるのは王の誉れ」と訳しています)とあるからです。神は隠し、一方、王の務めはその隠されたことを探り、そして発見することです。この「王の務め」が教会において重要視されないとするならば、たとえ制度や組織がしっかりとしていたとしても、それをささえていくのちを喪失する運命にあります。だが、教会におけるこの「王の務め」を担うのでしょうか。主の「弟子」しかおりません。

●エレミヤ書 29 章 13 節に「もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。」とあります。また、イエシュアの語られた「畑に隠された宝」「良い真珠を捜している商人」のたとえば、御国には「自分の全財産を売り払ってでも得る価値があることを知っている者がいる」ことを教えています。つまり天の御国は、隠された宝、良い真珠を熱心に捜している者たちのいる世界と言えます。神のみことばとその知恵は常に隠されています。ですから、それを捜して見つけ出すことはどれほど栄光に満ちたことでしょうか。神ご自身がそのことを推奨しておられるのです。

●「事を探るのは王の誉れ」の「**探る**」と訳されたヘブル語は「ハーカル」(חָקַר)で、徹底的に調べて隠された事柄を見つけるという意味です。新共同訳は「**極める**」と訳しています。これが神の代理者である王の務めであるとすれば、同じく「王である祭司」として召された私たちも、この使命を理解するだけでなく、真剣に取り組んで御国の秘密(奥義)を探り窮める必要があります。それは神の豊かな知恵を、この世ばかりでなく、「天にある支配と権威に対して、**教会を通して**」示すためなのです。

●次世代のために、こうした「弟子」が育まれることに心を尽くすことは、誉れある務めになると信じます。「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」という命令は、ひとりでも多くの人をクリスチャンにするということと同義ではありません。御国のための弟子、御国の宝をいつでもどこでも、どこからでも引き出して語ることのできる天の御国の「学者」が今日求められているのです。それは決して容易なことではありませんが、**弟子たちには、「天の御国の奥義を知る(「ギノースコー」 γινώσκω)ことが許されている**」からこそできることなのではないのでしょうか(マタイ 13:11)。

4. 「口を開いて、語る」イエシュア

●2 節に、「そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。」とあります。一見、当たり前のように思える表現ですが、ヘブル的視点から見ると、それが当たり前ではなくなるのです。イエシュアが口を開く前の状態(公生涯に入る前まで)は、主のみおしえである「トラー」(תּוֹרָה)が常に瞑想されており、イエシュアの心には神のみおしえが絶えず反芻されていることを考えなければなりません。その延長線上において、口を開くことで、主のみおしえがあふれ流れるようにして出て来たことをイメージしてみてください。

●3 節から始まる「幸いなことよ」を意味するギリシア語の「マカリオイ」(Μακάριοι)は、詩篇の「アシュレー」(אֲשֻׁרֵי)に相当します。詩篇 1 篇の冒頭は「アシュレー・ハーイーシュ」(אֲשֻׁרֵי הָאֵישׁ)です。その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさんでいます。この「口ずさむ」と訳された「ハーガー」(הִגָּה)は、瞑想用語の一つであるばかりか、一つのライフスタイルを指向しています。つまり、絶えずその人のうちで主のおしえが反芻され続けているのです。この「ハーガー」(הִגָּה)は詩篇 2 篇にも登場します。それは神に逆らう者たちに対して使われており、彼らの口から出て来るのは「つぶやき」です。それは彼らの心の中にある思いが言葉となって出てきたものです。私たちの口から出てくる言葉も、往々にして心の中にあるものが出て来るということを考えるならば理解できると思います。

●詩篇 1 篇の「幸いなのは、その人」(「アシュレー・ハーイーシュ」אֲשֻׁרֵי הָאֵישׁ)は、神の御子イエシュアのことを預言的に語っています(ヨハネ 5:39)。この方こそ天の御国の福音を私たちに教えてくれる偉大なるラビです。イエシュアは 30 歳にして公生涯を始められますが、それまでの期間、心の中に反芻していた御国の秘密を伝えるために、今や初めて口を開かれたのだと考えるならば、何とエキサイティングなことでしょうか。イエシュアの心の中で長い間にわたって反芻されてきたものが、今やその「あふれ」として口から出て来るのです。それはつぶやきではなく、世にいのちをもたらす神のみおしえであり、天からの神のパンです。これこそまさに「御国の福音」です。私たちはその教えに対して耳を開いて理解する必要があるのです。なぜなら、以下のように語られているからです。

【新改訳改訂第 3 版】詩篇 78 篇 1~4 節

- 1 私の民よ。私の教えを耳に入れ、私の口のことばに耳を傾けよ。
- 2 私は、口を開いて、たとえ話を語り、昔からのなぞを物語ろう。
- 3 それは、私たちが聞いて、知っていること、私たちの先祖が語ってくれたこと。
- 4 それを私たちは彼らの子孫に隠さず、後の時代に語り告げよう。

【主】への賛美と御力と、主の行われた奇しいわざとを。

●上記の詩篇 78 篇 1~2 節は、神の御子イエシュアを通して完結しています。イエシュアの語った「たとえ」は、私たちが人に良く理解できるように用いる例話とは異なります。それは「天の御国」における秘密であり、奥義です。ですから、イエシュアのたとえにある「なぞ」に関心を示し、その意味について一つひとつを尋ね求めることが許されている者こそイエシュアの弟子たる所以でした。それゆえイエシュアの弟子となる者たちは、「問いかけ」なければなりません。なぜなら、御子イエシュアの語られた「たとえ」

話の真意を尋ね求めなければ、なぞが解かれることはないからです。「たとえ」のみならず、聖書に記されているあらゆる事柄に隠されている秘密を解くために、尋ね求めることが弟子たちには許されているのです。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。」とイエシュアは言われました。このような者に、御父は聖霊という方を賜物として与えて下さると約束しています。この賜物なる聖霊の助けによって私たちは「昔からのなぞ」を悟ることができるのです。

ベアハリート

●ギリシア語で書かれた聖書を、ヘブル的ルーツに遡って解釈するという試み(=ヘブル的視点から聖書を読み解く試み)は、キリスト教会においては未開拓の分野です。しかし誰かがその分野にパイオニアとして踏み入って行かなければなりません。この働きに携わる者は継続的な熱意が求められます。しかし今の時代において、とてもやりがいのある仕事ではないかと思えます。御国の福音の奥義を知り、それを教えることが許されている弟子の存在こそ、今日のキリスト教会に必要とされていると信じます。この務めは、目に見える働き以上に、教会の土台にかかわる働きであり、これから教会が取り組むべき課題です。そして日本神の教会連盟の「次世代育成プロジェクト」における課題の一つでもあると信じます。なぜなら、このような取り組みは、「**教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、私たちの主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた神の永遠のご計画によること**」だからです(エペソ 3:10~11、改訂第三版)。ですから、祈り続けなければなりません。そうすれば、その目的を果たすためのすべての必要と道筋を神が備えてくださると信じます。

●最後に、イエシュアの語られたことばをもって終わりたいと思います。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 6章 27節

なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。

それこそ、人の子があなたがたに与えるものです。この人の子を父すなわち神が認証されたからです。

【新共同訳】ヨハネの福音書 6章 27節

朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。

これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。

【付記】 マタイの福音書がヘブル語で書かれたことを証言する教父たち

●マタイの福音書がヘブル語で書かれたことについての聖書外資料(教父)からの証言について。
以下は、ダヴィッド・ビヴィン著「イエスはヘブライ語を話したか」(河合一充訳、ミルトス社、37～40頁)からの引用です。

①小アジアのヒエアポリスの主教(紀元2世紀中葉)であった**パピアス**

「マタイは主の言葉をヘブライ語で記した。そして他の者たちがそれを、各々できる限り最善に翻訳をした。」(エウセビウス、教会史Ⅲ39・16)

②フランスのリヨンの主教であった**イレニウス**(120～202年)

「マタイは確かに彼の福音書の書き物をヘブライ人のあいだで、彼らの言葉で著したのである。」(エウセビウス、教会史Ⅴ8・2)

③**オリゲネス**のマタイ福音書注解の中では以下のように説明されている

「最初の(福音書)は、ヘブライ語で作られたが、マタイによって書かれた・・・ユダヤ教から信仰に入った者たちのために・・・」(エウセビウス、教会史Ⅵ25:4)

④カイザリヤの主教であった**エスセビウス**(325年頃)

「マタイは最初ヘブライ人に宣教したが、人々のところに行こうとしたとき、自分の母国語でもって自身の福音書を書いた。」(エウセビウス、教会史Ⅲ24:6)

⑤サラミスの主教であった**エピファニウス**(403年逝去)

「彼ら(=ナザレ派というユダヤ・クリスチャン)はヘブライ語でマタイ福音書全体を持っている。彼らはそれを注意深く調べ、ヘブライ文字で、最初に綴られたままに保存している。」(異端論破書、29・9・4)
さらに、「彼らも(エヴィオン派)マタイの福音書を認めており、・・・それを『ヘブライ人による(福音書)』と呼ぶ。それは正しい言い方である。なぜなら、新約聖書の作者のうちでマタイのみがヘブライ語で、ヘブライ文字で福音書を著したからである。」(異端論破書、30・3・7)

⑥生涯の後半31年間をベツレヘムで過ごし、すべての教父のうちでもっともヘブライ語に精通した人物で、ヘブライ語からラテン語訳を完成させた**ヒエロニムス**

「マタイはユダヤにおいて、キリストの福音書をヘブライ文字と言葉で作った最初の人だ。後にそれをギリシア語に翻訳したのが誰かは確実には知られていない。さらに言えば、ヘブライ語の本文そのものはカイザリヤの図書館に保存されている。その図書館は殉教者パンフィラスが大変な労力をもって収集したものだ。」

2017.02.16 空知太栄光キリスト教会 銘形 秀則